

# 東京未来ビジョン懇談会（第4回）

---

平成29年8月3日（木）

## —議事概要—

## 東京未来ビジョン懇談会（第4回）

平成29年8月3日

**【岩瀬次長】** それでは、定刻になりましたので、ただいまより第4回「東京未来ビジョン懇談会」を開会いたします。本日の進行役を務めます東京都政策企画局次長の岩瀬でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

初めに、会議の公開についてご説明いたします。

本日の会議の様子は、東京都のホームページ上でインターネット中継により配信されております。

報道機関の皆様は、懇談会の冒頭から終了まで取材が可能です。

また、本日の会議資料、議事概要、中継映像につきましては、ホームページ上に公開して参ります。

それでは、開会に当たりまして、小池知事よりご挨拶をいただきます。知事、よろしくお願いいたします。

**【小池知事】** 皆さん、こんにちは。夏の暑い日と言いたいところですが、今日はちょっと涼しくて良かったですね。

私も知事に就任いたしまして、もうあっという間に1年がたちました。そして、このビジョン懇の方も半年がたとうとしております。これからもますますこのビジョン懇で、うーんと先の東京がどうあるべきなのか。と同時に、明日の東京がどうあるべきなのか。是非皆さんのご意見、夢、希望を聞かせていただければと思います。特に2年目に入りまして、これからますます人にスポットライトを当てて、そして、様々な個性を展開していきたいと考えています。

当たり前の話なんですけれども、一人一人個性がある、その個性を生かせるように、特にダイバーシティの部分ですけれども、是非皆さんからもそのようなご意見が今日も伺えればと思っています。

ちなみに、色々グッズを皆さんの所に並べておきましたので、ご紹介しておきますと、これが2020年大会のパンフレット、ガイドブックができました。日本語版と英語版、それから、東京の新しいロゴができました。「Tokyo Tokyo」ということで、こういう素敵なブルーのものでありまして、中にバッジとかメモ、どこでももらえそうなものですが、でも、

センスいいでしょう。ということで、是非今日はお持ち帰りください。現時点で、まだ希少価値がありますので、お友達に見せびらかしてください。

あと、例えばこういうものもできました。これは江戸東京博物館、いらしたことがあります？ 面白いですからね。色々な博物館の中でも体験ができるというもので、面白いですけども、そこの本というかな。パンフレットというか、まとめたものですね。日本語と英語と両方、後で回しましょうか。江戸の宝物とか一杯詰まっていて、それをこのような本にまとめております。これだってお土産というか、思い出に持って帰っていただくにはいい1冊になったかなと。色々発信をしていきたいと思っていますので、またその面でも皆さんのご協力をいただくことがあればと思います。よろしく願いいたします。

今日も皆さんのプレゼンテーションを楽しみにしています。よろしく願いいたします。

**【岩瀬次長】** ありがとうございます。

本日の懇談会では、まず、田口様、アブディン様、そして、パッキン様にプレゼンテーションをしていただきます。その後、東京の未来や東京の可能性などについて、メンバーの皆様全員での意見交換を行い、おおむね18時頃の終了を予定してございます。

それでは、ここからの進行は知事にお願いをいたします。

**【小池知事】** それでは、早速、田口さんから行きましょうか。それぞれ10分間程度のプレゼンテーションをお願いすることとしております。よろしく願いします。

**【田口垂希様】** こんにちは。改めまして田口垂希です。今日は何をお話ししようかというのをすごく悩んだんですけれども、やっぱり私はパラリンピアン、障害者であり、パラリンピアンですので、そういう立場から共生社会の実現に向けてお話ししたいと思いません。

共生社会という言葉は最近よく使われておりますので、皆様もよく耳にされていると思うんですけども、改めて調べてみました。「共生社会とは、誰もが相互に人格と個性を尊重し、支え合い、人々の多様なあり方を相互に認め合える全員参加型の社会である」です。そこには「障害者の有無にかかわらず」ももちろん含まれます。

では、その障害者という、障害者はどれぐらいの人数が世界にいるというか、割合とか皆さんお分かりですか。こちらはWHOの調べでは、世界の人口の10%が障害者とされており、人数にしては約6億人だそうです。そして、日本の場合、「日本人が100人の村だったら」とよくあると思うんですけども、それに例えるとこのような数字になります。100人いれば、障害者は6人です。LGBTとか高齢者とか子供、左利き、妊婦とかそ

ういう人たちもこの数字になります。

また、日本で多い名字のベスト4、鈴木さん、佐藤さん、高橋さん、田中さん、これが日本で一番多い名字のベスト4なんですけれども、この人数が合計で約700万人いらっしゃいます。私もこれを聞いたときに、私の友人とか知人とか同僚を考えたときに、友達、学生の時、大体30人ぐらいいるんじゃないのかなと思いました。パーッと数えたら。皆さん、どうですか。何かワーツと数えたら、多分3、40人はいて、この席にも多分いらっしゃいますよね。それぐらい、たくさん周りにはいらっしゃると思うんです。

そして、日本では、何らかの障害があり、障害者手帳を持つ人の人数が730万人とほぼ同数います。では、皆様の周りに、さっき言った知人、友人、あと、同僚とかに何人ぐらい障害者いますか。3、40人います？ もしくは、今日、障害者、何人見ました？ 多分私だけという人の方が多いいのではないかなと思います。

大体この質問をすると、やっぱり鈴木さん、佐藤さん、高橋さん、田中さんは身近にたくさんいるけれども、障害者の人たちは、自分の周りには障害者と言われる人はいないとか、障害者を見かけることもないという方が多々いらっしゃいます。もちろんこの730万人の中には、内部疾患の人とか、重複している障害の人もいますので、この数が正解ではないですけれども、そこを加味しても、やっぱり皆さんの周りには少ないのではないかなと思います。幾つか理由はありますけれども、やっぱり日本ではまだまだ障害者が外出しにくい環境であったり、また、働く場所がない人もたくさんいるからだというふうに私は思っています。

そこで、共生社会の実現に向けて、私がこの未来ビジョン懇談会で提案したいのが、「すべての障害者が働ける社会へ！」、社会をつくるですね。日本の首都でもある東京からそういうのを始めて、それを日本中に広げて行ってほしいなというふうに思っています。

現在、2020年、東京パラリンピック開催が決まりまして、パラリンピアン、パラリンピックを目指しているトップアスリートは就職支援制度というのがありますので、企業に属する選手がどんどん最近は増えてきています。ただ、アスリートだけでなく、全ての障害者が働くという選択ができる社会にならなければいけないと思っています。

日本ではまだまだ障害者の働く場所が少なく、障害者の中には、働きたくても、障害者という理由で働く場所がなかったり、会社がバリアフリーなど、障害者を受け入れる環境でなかったりするため、働けない人が少なくありません。

また、障害の度合いにもよりますけれども、環境さえ整えば普通に働けるということを

知らない方々もまだまだたくさんいます。障害者本人もそのことを分かっていない障害者もあります。私自身も病気になるまで、そのことを知りませんでした。今、だから、私のように働く場所のある私たちがしっかりそれを、障害者でも環境を整えば働くことができるということを証明していかなければいけないというふうに思っています。アスリートだけでなく、全ての障害者に働く機会が増えるようにしたいなというふうに思っています。

私自身、25歳の時に病気で足が動かなくなりまして、車椅子の生活になりました。当初はこんな体では、もう一生、自由に動くことはできない。友人とか自分の周りの人たちのように、遊びに行ったり、働いたりすることはできないんだろうなというふうに考えていたときもあります。落ち込んでいたときもあります。

退院後、それまで勤めていた会社が、私はすごく恵まれていると思うんですけども、働いていた会社がバリアフリーで私が働ける職場がどこかにあるんじゃないかと関係会社を探してくれて、私は仕事復帰することができました。ただ、会社にとっては、私が初めての車椅子ユーザーだったために、働き始めた当初は、周りの人たちもすごく不安で、みんなが私を助けようというか、色々気を遣ってくれていたんですね。私が何か物を取りに行こうとしたり、コピー機とかファクスの前に行ったら、みんなが大丈夫かなというふうに目で追っているのを感じました。外に出ようと思って、扉に行こうとしたら、誰かがバナーと飛んできて、開ける。そういうのもあったんですね。

そういうふうにみんなが何か気を遣っていたんですけども、今では同僚たちも慣れまして、「何かできないことあったら、田口、言ってくるだろう」と思っていて、誰も何もしなくていいです。何にも助けにも来ないです。何かバタバタ暴れているぐらいで、やっと、「大丈夫？」とかいうのは言われますけど、私はそれでいいと思っています。それが冷たいんだなんて思ったことはないですね。私はそれでいいと思っています。やっぱり自分でやれることはやらなければいけないですし、何よりも自分でやれることがある、できることがあるとか、できることが増えていくということが私はうれしいですね。

共生社会と言うと、日本では、健常者が障害者を助けるイメージを持たれる方が多々いらっしゃるんですけども、私は、障害者、健常者、関係なく、お互いが思いやり、助け合う社会だと思っています。今では私が同僚の仕事を手伝ったり、同僚が落としたものを拾うこともありますし、あと、私の運転する車で知人とか同僚とみんなを外に出かけることもあるんですね。そういう意味では、教育や言葉で共生社会を教えるということも大切なんですけれども、まず一緒にスポーツをしたり、一緒に働いたり、そうすると自然に意

識せず、共生社会が生まれるということを私は実感しています。一緒の時間を共有して、心で感じるのが共生社会への一番の近道だと思っています。それには全ての健常者が、全ての障害者が、健常者と共に働ける方法を考えていく必要があるのではないのかなというふうに思っています。

こちらが日本の障害者雇用の現状です。従業員50人以上の会社には法定雇用率が課せられていまして、その法定雇用率達成企業の割合は、この48.8%です。約半分しか達成していません。ただ、これはあくまでも、障害者の法定雇用率を達成している割合ですので、働く世代の障害者がどれだけの割合で働いているかというのとは違います。そうすると、働きたい障害者がどれだけ働けているか。数字は全然変わってくるのではないのかなと思います。

じゃ、障害者が働けるようにするにはどうするかというと、やっぱりハード面ではバリアフリーを整えることはもちろん必要です。あとはITを活用するなどの方法もあります。あとは障害者雇用の考え方も考えていかないといけないと思います。どうしても日本ではこの雇用率から入るといのが大きいので、障害者のキャリアとかは関係ないです。どちらかというと、雇用率を達成するためにとか、この障害のこのぐらいの軽さだったら、何か戦力になるんじゃないかとか、そういう考えをまだまだ持っている企業もあります。障害者にも高学歴、東大とか出ている高学歴の障害者、あと、能力のある障害者もいます。ですので、能力を認める、キャリアを認める、そういう社会というか、企業になっていかないといけないなと思います。

最近よく障害者の「害」の字について議論されることがあって、この「害」を使わずに、平仮名の「がい」を表現されることがあります。理由は、こっちの「害」は、こういう字を用いると、障害者が周囲の人に害を及ぼしているという印象を植えつけるということからです。また、「碍」という、この字ですね。こっちの「害」という字がすごくイメージが悪いというので、そういう配慮があるんですね。

でも、私もですし、障害者、ほとんど私の周りの障害者の人は正直どちらでもいいと思っています。というよりかは、変えない方がいいのではないのかなと思っています。それは、「がい」が、みんながこの「害」のイメージが悪いというのは、障害者の「害」が人についていると思っているからだと思うんですけども、そうではなくて、障害者の「害」が社会や環境にある、そういうふうに捉える必要があると思うんですね。それを平仮名の「がい」にしてしまったら、その言葉すら何か分からなくなってしまいますので、そうい

う意味では、この「害」を私は残す方がいいのではないかというふうに思っています。

2階以上の建物とかエレベーターが付いていれば、私のような車椅子ユーザーでも自身で行くことができます。そうすると、障害を感じることはないんですね。障害者用お手洗いとか障害者用駐車場が整っていれば、そこで長時間過ごすこともできます。視覚障害者の人でしたら、点字ブロックなどがあれば、自身で動くことができます人もいます。パソコンなどのシステムでもそうですよね。音声朗読の機能などが整っていれば、視覚障害者も使うことができますし、これらが整っていれば働くこともできます。

ただ、どれだけそういうハード面が整っていても、それを使うのは人です。日本では、車椅子用駐車場とか車椅子用お手洗いを使用される健常者が少ない状況です。よくこういう話をすると、障害者用お手洗いは、いつも空いているから使ってもいいんだよねとか、広いから、荷物が多いときにちょうどいいんだよね、着替えるのにちょうどいいんだよねと言う方がいらっしゃるんですけども、空いているのはその瞬間、その方が入られる瞬間であって、その人が入っているときに、もしかしたらもうすぐ漏れそうという障害者が待っていることもあるかもしれないんですね。空いているのはその瞬間で、そこだけしか使えない人がいる。そこしか選択肢がない人がいるということを理解していただかなければいけないと思っています。

また、点字ブロックの上にも、アブディンさんとか経験されたかもしれないんですけども、自転車が停めてあったり、そういうふうにソフト面でのバリアも多く、心のバリアフリーについてももっともっと考えていかなければいけないと思います。ただ、こういうのも身近に障害者がいる、働いたりしていると、自然にみんな理解していく環境になるのではないのかなと思っています。

ハード面、そして、ソフト面を整え、お互いを尊重し、助け合い、思いやる社会となり、いつかは企業が義務で雇うのではなくて、「法定雇用率をなくし、すべての障害者が納税者となる！！」社会を私はつくっていきなりたいなと思います。働くということは、人としてやっぱり喜びにもなりますし、社会とつながるきっかけにもなります。2050年、東京が世界で一番、例えば障害者が稼げるまちだよとか、障害者が一番活躍できる、そういう社会を東京がつくっていくというか、都市にしていきたいなというふうに思っています。

繰り返しになりますが、障害者が一方的に助けてもらうのは共生社会ではなく、障害の有無にかかわらず、お互いを尊重して、助け合い、思いやることだと私は思っています。

障害者自身も、「障害があるからできないのに、周りが分かってくれない」とか言う人も

やっぱりいるんですね。そうではなくて、自分たちの言葉で私たちが説明していく必要があると思っています。「障害があるからできないのに分かってくれない、周りが分かってくれない」と言うことから、一緒に働き、スポーツなどを通じて、人と触れ合うことで、できないことなら、できないことは「できない」と言わなければ分かってもらえない。これはできないけど、これならできるということを言えばいいんだと、障害者自身が思うように、そういうふうになっていくことが必要。それは意識やマインドセットの変化がやっぱり双方向に表れてくると思うんですね。

障害者が弱者で守られたいわけではないです。特別扱いされたいわけではないです。守ってもらいたい存在、そういうわけではないんですね。そのためにも皆さんの心に届くように、自分たちの言葉で私たちが発信していきたいと思いますので、よろしくお願ひします。共生社会の実現に向かって、私も皆さんの心を撃ち抜けるように頑張ります。

よろしくお願ひいたします。ありがとうございました。

**【小池知事】** ありがとうございます。この法定で何%とか、雇い入れなくてはならないとか、あまり企業絡みの人じゃないとよく分からないかもしれませんね。ありがとうございます。こういうルールにもなっているんです。でも、48%ということは、まだ半分しかということでもあります。

先日、田口さんと、それから、次のプレゼンターのアブディンさんと一緒に、私も車椅子に乗ってまちを歩いてきましたというか、歩いてきました。流してきました。ほんのちよつとの段差があるだけで進まないんですね。片や、目が不自由だと、そのちよつとの段差で車道に出ることが分かるということで、なかなか両方の機能が必要だということが実際やってみてよく分かりました。

さあ、そのアブディンさんに、次、お願ひいたしましょう。ちなみに、この方は、スーダンからの人であるということを改めて申し上げておきたいと思います。

じゃ、よろしくお願ひします。みんな見えています。ありがとうございます。

**【モハメド・オマル・アブディン様】** お願ひします。皆さん、こんにちは。田口さんのすごい洗練された熱いスピーチの後に話すのはすごい心苦しいんですけども、私の場合は、こういった本当に具体性のある話というよりも、ちよつと夢、ちよつと抽象的でつかみどころのない話になる可能性があるんですけども、それは承知の上、この話をして、皆さんからまたその話を膨らませていただいたり、都の皆さんがそれを政策に具体化していつてもらえればなと思います。



「日本の東京から世界の東京」へというところですが、実は国際都市構想、「多様性を武器とした国際都市構想」ということですが、それは、私は勝手に、東京はすごいポテンシャルがあって、ものすごい、日本の東京だけにするのはもったいないなど。私は東京に勝手に片思いしているのです、そういった片思いを全開に、東京が世界で果たせる役割について話したいと思います。

前回に既に国際都市構想に向けて、高橋さんから、文化芸術面からの施設、世界的施設とか、あるいは長谷部さんからは、渋谷のブランド化とかそういったもの、そういう話が出てきましたけれども、私は人にフォーカスしてみたいと思います。

まず、「多様性を認めましょう」ということをよく私はテレビとかで聞くときに違和感を感じるんですけれども、多様性を認めるということ自体が、このことは、まあ、僕の日本語の理解が足りないかもしれませんけれども、すごい消極的に聞こえるんですね。要は、いやいやだけど、ちょっと受け入れなきゃいけないとか、認めなきゃいけない。僕はむしろ進んで、率先して、この多様性ある状況を、認めるのではなくて、求めることが大事なんじゃないか。これから日本の若者とか東京の若者が生きていくすべになるんじゃないかなと私は思っています。

もはや、いい大学に行って、いい会社に就職する。このモデルはもう崩壊しつつありますし、2050年にはこのモデルがあるかどうか分からないので、一人一人がすばらしい大きな力ですね。大きなキャパシティを持っていくことは、人口が減少している日本のこれからの生きていく方法になるんじゃないかなと思います。私は日本の若者のものすごいその底力を見せていただいた経験があって、その体験をお話ししながら、今後この日本の若者を育成していくことで、東京は国際都市の先頭になり得るんじゃないかなと思います。

私の体験というのは、僕はアブディンと申しますけれども、視覚障害者ですね。20世紀末に、日本にスーダンからやってきましたけれども、ほとんど今は人生の半分を日本で過ごしています。日本に来てから、小さい時に本が読みたくても読めなかったりとか、点字がなかったりとか、そういった環境で勉強してきましたけれども、日本に来て、どんどんいい環境で勉強できたり、仕事ができたり、好きなスポーツもできたり、そういったすばらしい環境に恵まれていました。ただ、まだまだ学習環境というのは整っていないし、出版物、目の見えない人が読める出版物というのは、流通している出版物の5%にも満たないんですね。アクセシブルな形のものでですね。これは英語で「Book Famine (本の飢餓)」という現象ですけれども、それでもやっぱりすごくいい形で勉強できたので、当然ながら

スーダンの人たちも何かちょっとしたきっかけでもできるようになるんじゃないかなと思って、学生ながら、素人ながら、無謀にもスーダン障害者教育支援の会という、CAPE DSという団体を10年前につくったんですね。つくったと言ったって、そんなにお金があるわけでもないし、学生だったので、このつくった時にびっくりしたのは、周囲の日本の学生の皆さんも一緒にやろうよと。どんどんどんどん彼らは率先して、この活動の99%を支えてきたのは、無償で働いてくれた日本の学生たちですね。助成金を申請したりとか、スーダンに行って、その当事者団体と話をしたりとかしたのも、ほとんど日本の学生だったんですね。

僕はどちらかと言うと、講演会とかでサーカスのパンダとか虎のように出てきてしゃべれば、当事者が出てきたという感じですね。そこで感じたのは、いや、日本の若者も何かバッシングが多いんですね。最近、今頃の若者とか多いんですけど、それを聞くたびに、ああ、違うなと思っていて、むしろ彼らは一人一人色々なものを探し求めている人が多いんじゃないかなと、自分の乏しい体験を通じて感じました。

ですので、自分たちがやってきたことを紹介しますけれども、この団体をつくって、障害者の社会への完全参加と平等ということで、例として掲げて、それを実現するには、基礎教育の支援、点字の普及とか、あとは情報、ICT教育ですね。情報教育の普及、これはまさに情報、視覚障害は情報障害ですので、それを取っ払うのにやっぱりICTの力はものすごく大きいですね。そのトレーニングだったり、あるいは現地の当事者団体が自らこの仕事をしていくための協力ですね。その支援。

最後に、障害者スポーツの普及です。これは2020年にパラリンピックが、ここに田口さんいらっしゃいますけれども、私が勝手にその時に、日本に来てからブラインドサッカーというスポーツに出会って、やるようになったんですけども、2020年に私がスーダン代表として、スーダンのチームを連れてきたいなと思って、極めて個人的思惑で、スーダンでこのブラインドサッカーの普及をし始めました。

こういった活動をしてきましたけれども、先ほども申し上げましたように、これらの活動のほとんどは日本人の若い、本当に大学生とかがサポートしてきました。私は、そこから考えてみると、更に更に国際都市・東京に向けては人材が必要です。多様性を肌で、実感として感じる人材をどんどん育成していかなくちゃいけない。その責任を誰がとるのかということですが、当然ながら、私が思うには、例えば東京都だったら東京都だけではなくて、都民もやっぱり、将来、自分たちも年金をもらい続けるために、すごい力のある若者

ですね、一杯稼げる若者を育成しなきゃいけないです。死活問題だと思いますね。あるいはその企業、また、その市民社会団体とかそういったものと一緒にやっていかなきゃいけないと思っています。

じゃ、僕なりのまだ固まっていない構想ですけども、まず攻めの、世界に飛び込もうということですけども、僕はある時、日本人の記者と話した時に、彼は2005年の南スーダンのジュバという所、紛争直後の時に南スーダンのジュバという首都に入ったらしいんですね。その時にもうホテルらしいホテルは一つしかなかった。それは何とジュバ北京ホテルだったんですね。中国、すごいですね。紛争中でもホテルつくりましたので。そこで働いていた中国人の若者と仲良くなって、給料は幾らですかと聞いたら、その若者は、私は給料をもらっていないと。何でだろうと言ったら、自分が将来、自分のビジネスをつくるためにこういったリスクな所でビジネスを学びにきたと。どうでしょう、皆さん。これは日本の若者はこれで勝てますか。そういったところで、世界の若者はもう出ていっているわけですね。

東京都も当然ながら色々な取り組みをやっています。「若い子には旅をさせよ」というのは、昔のどこかの旅行会社のキャッチフレーズだったらしいけれども、東京都は当然ながら、ニュージーランドとかオーストラリアとかそういった所に高校生や都立の大学生を派遣するプログラムを持っていますけれども、これも大事ですが、これだけでは足りないと思います。なぜなら、これは環境としては、日本に近い環境とか、非常に整っている環境ですので、それだけではなくて、もうちょっとイレギュラーな厳しい環境にどんどん出していけば、もっともっと人間力というか、そういったものが育んでいけるんじゃないかなと思いますので、ここで私は国際協力構想を打ち出しています。

どういうことかと言うと、東京都は、発展途上国などといった所に東京の若者を、まあ、丁稚奉公と言ったら、強制じゃないですよ。もちろん希望者の希望が前提ですけども、丁稚奉公に出していこうじゃないかと。それは本当に何にもない形で、貧困などといったものと闘いながら、明日を切り開いていこうとする若者の姿を見たりとか、その若者と共に、苦楽を共にしながら、自分たちも何か奮い立たせたりとか、人生をもっと豊かにしていこうということにつながるのではないかとちょっと想像するんですね。

それは彼らが帰ってきてから、東京に帰って、継続的に東京と、東京にある国際NGO、日本の国際NGOは非常に優秀ですけども、世界で一番貧乏な国際NGOなんですね。日本人の財布のひもも非常に厳しいので、かたいですね。優秀ですけども、非常に貧乏

ですので、都と人材を育成するかわりに、国際上、連帯する支援を通じて、国際協力の人材をつくっていくことがすごい大事なかなと思います。

なぜ大事か。そのメリットとしては、幾つかありますけれども、大事なのは、ちょっと時間がなくなったので、一つは、国際協力の人材をどんどん世界に輩出することは日本のソフトパワーにもつながるんですね。あとは国と国の関係だと非常に難しい、制限があるんですけれども、都市だったら都市外交が展開できるんじゃないかと私は思っています。

最後に、私が付き合ってきた団体を支えてきた若者、彼ら、彼女たちのその後を見ると、最初は外の問題を中心にやってきたんですけれども、それを通じて、彼らもどんどん足元の問題に更に気づくようになっていたり、あるいはそれを総体的に考えるようになるんですね。なので、それを通じて、もっとクリエイティブな足元の問題を、日本国内の問題を解決する優秀な人材を育てていけるんじゃないかと思っています。

東京は、日本はもう人口がどんどん減少していきます。一人一人の力を伸ばしていかなければ、日本の明日はないと私は思います。何か政治家みたいになってきましたね。と思いますけれども、私の本当に小さな小さな活動を通じて、もっともっと人材育成に力を貸して、明日の国際都市構想を実現するための一つの大事なピースを東京都も力を入れていくべきんじゃないかと思って、話を終わりにしたいと思います。

**【小池知事】** アブディンさんでした。ありがとうございます。すごいですよね。丁稚奉公なんていうこと。

**【伊勢谷友介様】** スーダンにも丁稚奉公があるんですかね。

**【小池知事】** スーダンには丁稚奉公はないけれども、この言葉を使うというのはすごいですね。本当に言語能力はもうすばらしいものがある。言語能力と、このすばらしい人徳というかね。ありがとうございます。是非これはスーダンのブラインドサッカー部をみんなで応援しない？

**【モハメド・オマル・アブディン様】** 是非是非。

**【伊勢谷友介様】** それ、日本と戦うときもあるんですよ。

**【モハメド・オマル・アブディン様】** そうですね。

**【小池知事】** そのときはどっちを応援しましょう。

**【伊勢谷友介様】** どっちを応援する。アブディンさんはそのときはどちらを？

**【小池知事】** アブディンさん、どちら？ スーダンだね。

**【モハメド・オマル・アブディン様】** しかるべき対応をさせていただきます。

【伊勢谷友介様】 応援合戦ですね。でも、それができたらいいですね。

【小池知事】 すごいですね。本当にね。ありがとうございます。

それでは、パトリック・ハーランさん。パクン、よろしく願いいたします。

【パクン (パトリック・ハーラン) 様】 はい。お願いします。一番嫌な大トリという立場なんですけど、時間も時間なので、早速参りましょう。「東京2050年に向けてパクンからのダイバーシティ・ビジョン案」。結論から。「少子高齢化、万歳！」と誰も言わない。「あら、こいつ、日本語間違っていない？」とみんな思っているかもしれないんですけど。

これはちょっと置いといて、まずはウォーミングアップから参りましょう。クイズです。クエスチョン1。キリンを冷蔵庫に入りたいときはどうしたらいいでしょうか。

はい、菊地さん。

【菊地裕介様】 でっかい冷蔵庫。

【パクン (パトリック・ハーラン) 様】 でっかい冷蔵庫をつくる。大事なポイントです。入りたいときは、その冷蔵庫にドアを開けてキリンを入れる。これが正解です。皆さん、ちょっと難しく考えていませんか。これはみんなちょっと悩んじゃったでしょう。

【モハメド・オマル・アブディン様】 キリンビールだったら簡単に入る。

【パクン (パトリック・ハーラン) 様】 キリンビールだったらね。うまいね。参りました。

続いて、クエスチョン2、じゃ、行きますよ。メイミさん、教えてください。

【メイミ様】 はい。

【パクン (パトリック・ハーラン) 様】 ゾウさんを冷蔵庫に入りたいとき、どうしたらいいでしょうか。

【メイミ様】 扉を開けて入れる。

【パクン (パトリック・ハーラン) 様】 うわっ、残念。冷蔵庫を開けてゾウを入れる。そう思うでしょう。正解はそうじゃなくて、冷蔵庫を開けて、キリンを出して、ゾウさんを入れる。

【メイミ様】 キリンが入っていた。

【パクン (パトリック・ハーラン) 様】 皆さん、行動の結果をちゃんと考えていますか。

さあ、続いて、ちょっと変わってクエスチョン3。百獣の王、ライオンがジャングル会議を開き、全ての動物を集めましたが、1匹だけが来なかったです。何の動物でしょうか。

分かった人。正解はゾウさんです。冷蔵庫に入っているから。

皆さん、前のことを忘れてませんか？ 大丈夫ですか。

さあ、続いて、ボーナスクエスト。これだけ2,000点です。頑張りましょう。

猛獣のワニが一杯住んでいる川を今、渡りたいですか。船がない。どうしたらいい。分かった人。おっ。

【青木亮輔様】      ワニの上を歩く。

【バックン（パトリック・ハーラン）様】      いい線ですが、残念。正解は泳いで渡ればいい。ワニはみんなジャングル会議に行っているんですよ。そこにいないんです。ここにワニがいるんです。皆さん、ちゃんと失敗から学習していますか。

これは大手コンサルティング会社がつくった人材育成のためのクイズなんですけど、これは頭の体操です。頭を柔軟して、これから聞いていただきたい。

それでは、いよいよ本編です。ダイバーシティと言ったら様々な分野がありまして、課題も山積みになって、具体策も結構出てきているんです。僕は正直、こういうプレゼンをしようと思ったんです。すぐに思いついた。僕、今日、3番目ですよ。前の人がこの辺の内容をしゃべってしまったら、うわっ、やばい。かぶってしまう。芸人として一番やっちゃいけないパターンだ。さらに、東京都が先に考えていることを言うかもしれない。今日、会場に入ったら、まさにそのとおりです。ここに僕が言おうと思っていたようなことが一杯続いているんです。もしかしたら僕のプレゼンをそのまま盗用しているんじゃないかと思うんです。

やばい、やばい、どうしようかなと思ったときに、そこで思い出したんです。この方の言葉。このビジョ懇において、都知事がいつも、東京の2050年を思い切って描けというミッションを出しているんですね。思い切り行けと言うんです。そうだ、そうだ、そのとおりだ。今の2017年の考え方でダイバーシティプレゼンをやってしまったら、最後に終わったら、芸人にとって一番嫌な展開が来るかもしれないです。「どうもありがとうございました」と言った瞬間、「からの～」が出てくるかもしれないです。これじゃ物足りない。みんなと同じ。「おまえにもっと期待していたのに」と言われそうな気がして、怖くなったんです。ということは、この2017年の考え方を捨てて、2050年の考え方で行くことにしたんです。

さて、それはどうなんでしょうか。何なんでしょうか。ダイバーシティで言うと、例えば性別、ジェンダーに対する概念が、この33年で大きく変わるはずですよ。言葉遣いも変わ

るはずです。2050年の言葉遣いは、例えばこういう職種があります。社長、検事、アナウンサー、サッカー、騎士とか。

これは、「あらっ、2017年と何も変わってないんじゃないか」と多分思われているんですけど、これを見てください。2017年で僕らが使っている言葉には、これもあります。女社長、女検事、女子高校生とか、女性カメラマン、女子アナウンサー、女性都知事とか言ったりしますよ。これは物珍しさから生まれる表現ですね。この根底にあるのはダイバーシティのなさですよ。2017年の考え方は、ああ、女性がこういう職業をやるのは珍しい。わざわざ紹介しなきゃいけないという考え方なんです。これを捨てなきゃいけない。2050年の考え方で行かないといけない。もう女性、女優、女流、女子とかは付かないと思うんですよ。下手したらこの辺に男性が付くかもしれないです。珍しい。「ああ、男性都知事ですか」という時代が来るかもしれないです。それぐらい、先の、先のことを考えようと。つまり、このダイバーシティを考えているときにも、僕はそういう地雷を踏んでいるんじゃないかと。

考え直したら、ああ、ここにあった。女性の社会進出とか、皆さん、手元の資料にあったと思うんですけど、見た瞬間、「あらっ、これ、古くない？」と思った方、多分少ないと思うんですけど、33年先にはこの考え方はもう古いはず。何々？ 2017年は会社に勤めないと女性は社会に進出していると思わなかったの？ 古いな、かわいいなと多分この先の方は振り返ってみて思うんですよ。こういう古い考え方、古い言葉遣いは全部やめて、「からの～」ダイバーシティを考えようかなと思ったんです。

そこでテーマとして、やっぱり様々な分野、様々な課題、そして、様々な具体策を考えるようになったんですけど、まあ、僕はとにかく規模を大きくするしかない。細かいところじゃなくて、性の自由とか、無障害。障害というのは結局様々なそれぞれが持っている個性のことじゃないかなと。これも結局ダイバーシティの一つなんじゃないかと、そういう考え方になる未来が来る。

テーマとして取り上げることにしたのは、少子高齢化、今、大ピンチです。毎日のように話題になっていますが、少子高齢化の流れを見ると、人口が減少します。労働人口も減ります。空き家が増えます。そして、生活困難者も増加する。もう目の前にあることです。もう始まっていることなんです。

でも、ちょっと考え方を変えてみませんか。これによって何が起きる可能性があるかと言いますと、大胆な移民政策が導入されるかもしれないです。色々な方が色々な国から

来る。優秀な人材が集まる。空き家が増えるということは、もしかしたら1人当たりの床面積がとれるようになる。住宅事情に大きな変化が起き得る。さらに、生活困難者がいるなら、良し、ベーシックインカムなどの大胆な政策を先進国として、もう先にこの日本、この東京が導入する。もう様々な可能性がこの中にありまして、同じく少子高齢化から始まって世界を引っ張るダイバーシティと生活のゆとりを誇る少子高齢化先進都市になるんじゃないかと。ちょっとワクワクするようになってきたんです。

何が違うかと言うと、少子高齢化、万歳という結論にたどり着くには、この危機に対する考え方を変えなきゃいけない。危機とはピンチです。でも、ピンチはチャンスだとよく聞きます。でも、ピンチはチャンスだと言うと何か、西洋人っぽい考え方ですね。横文字だと突っ込みが入りそうな気がする。でも、この文字を見てください。「危機」には、危険の「危」と機会の「機」、両方持ちあわさったものなんです。可能性を含んだものです。ピンチがチャンスです。

さて、練習しましょう。「AIの危機」とよく聞きます。労働人口の49%がAI・ロボで代替可能になる。つまり、ここにある職種がそのうち全部消えていってしまうんじゃないかという、非常に怖い実態が今、目の前にありますが、考えてみると、技術革新で実現するダイバーシティもあるはずですよ。AI・ロボ、VRによって、アソシエイト、アシストで、こんな分野で様々ないいことが起き得るんですよ。後でゆっくりいくらでも説明します。ここで飛ばします。

でも、最終的に次の革新へつながる。というか、その革新のペースが上がるはずですよ。可能性がブクブク、ブクブク出てくるんですよ。この自由になった人材もどんどん新しい、興味のある分野に活躍できる。みんなが思っているよりも2050年には生活のダイバーシティ、働き方ダイバーシティ、まちづくりのダイバーシティ、そして、文化的ダイバーシティが実現できているはずですよ。危機を、危険ではなく、機会と捉えていけば。これはみんな世の中の皆さんにもお願いしたんですけど、何よりもこの部屋に集まっているビジョネアの皆さんに託したいところです。皆さんが機会を持って、この先、1歩、2歩ではなく、100歩、1,000歩先のことを考えていただきたいです。

この2050年、少子高齢化幸福先進都市になると僕は信じています。ダイバーシティ満載、AI・ロボ、VR、大活躍中のその東京を実現させるためには何が必要なのか。一番大事なものは、思考、議論のダイバーシティ、一番頭にあったあのクイズは、実は本題です。頭を柔軟にして、毎日でも体操して、ふだんから聞くような案ではなく、その先のとんでも



ない案を出し合って、議論していただきたい。そう言っている僕も責任をとって、とんでもない案を幾つか、資料の中に残しています。いくらでもこの先、議論させていただきたいと思うんですけど、とりあえずその頭の柔らかさ、とんでもない案、とんでもない議論を皆さんの力で実現させて、そして、2050年、ダイバーシティ満載の東京にしていきたいと思います。

これが「東京2050年に向けてパクンからのダイバーシティ・ビジョン案」でした。「からの～」と言わないでください。以上です。

【小池知事】 ありがとうございます。パクンからの案。色々具体的な案も出してくれましたね。福島、それから、大学受験にスマホ持ち込みオーケー、新築地市場に。FTA、EPAに、カーボン税、いいですね。地産地消を促しながら。ベーシックインカム。なるほど。フィンランドが導入するとか言っていますね。住宅解体税。へえー。

【パクン（パトリック・ハーラン）様】 大胆でしょう。みんな嫌がると思うんですけど。

【小池知事】 大胆だよ。でも、皆さんの発想を変えましょうというところで、非常に皆さんの発想も柔らかくなったかと思います。

ちなみに、危機というのは、危ないと書くけれども、機会の機、チャンスでもあると言ったのはジョン・F・ケネディです。

【パクン（パトリック・ハーラン）様】 そのとおりです。

【小池知事】 はい。そういうスピーチがあったりするんですね。さすがハーバードですね。ありがとうございます。

さあ、それでは、皆さんここから、今日の3人のダイバーシティが中心で、そして、発想も変えましょうということが中心だったかと思います。皆さんから、まず発言、お願いをしたいと思います。いかがでしょうか。

じゃ、伊勢谷さん、お願いします。

【伊勢谷友介様】 皆さん、発表ご苦労さまでした。ありがとうございました。とても刺激的で、何かやっぱり僕のところから始まって、皆さんのがすごく聞き取りやすくなった感じがあって、やり直しさせていただきたい気持ちもありつつも、今日のお話って、意外と皆さん共通項がおありだったような気がしていて、多様性ということをどうやって社会がきちんと現実化していくかというところだと思ったんですね。メインは。特に最初の障害者という、亜希さんのお話の中で、このお話に似ていると僕が感じたのはLGBTの

方たちや、あと、がん患者の方でも、ステージの高い方々とか、あと、ご老人。

今、僕らが社会の中で一緒にちゃんと活躍をできていない方々というのは、じゃ、誰が彼らの条件、権利とか様々なことを当たり前にしていくのかと思うと、結局、マジョリティである人たちが変わらないと、変えないと、マイナーの人たちの環境というのは絶対変わらないんですよ。ということは、これは考えると、逆に普通の人たちが意外と僕は反対してないよと言うんです。ただ、行動しないんです。行動しなければ変わらなくて、行動しない人ということが、実は悪と感ぜられないというのが意外と今の世の中のデメリットだなと僕は思っていて、僕の友人に話しても、やっぱりそこなんですよね。

社会としては、やっぱりこの方々と一緒にきちんと働けるようにすることによって、より働き手も増えると同時に、たくさん、本当に多様性をつくることで、社会として強くなるということには絶対変わりはないですし、金銭的に言っても、利益が絶対出てくることでもありますので、これを社会がちゃんと担保していくということ、マジョリティである人たちが自分たちの役目だと思って行動するべきだなということを非常に思いました。そんなところですかね。

あと、もうパクンさんの言っていること、本当に僕、とても大好きな意見。最後の方とか、刺激的過ぎて、ちゃんと読んでないですけども、後で改めて勉強させていただきつつ、僕からするととても、何て言うんでしょう。失敗したことを忘れて、次の問題が何かということも考えずに、そして、その次の展開を初めて考えましようみたいになっていることが色々あって、正直言って、最初に僕が話したLGBTの話、障害者の話、がん患者の話、これは本来はずっとあるんですよ。なんですけど、問題にしてこなかったの、やっとな問題にしてきたところだから、僕はこれをちゃんと、ここに当たらない人たちを、例えばLGBTも出しましたけど、がん患者とか障害者であるとかLGBTであるとか、じゃない人たちはみんな動かなきゃいけないということを僕は何か指示されている、そういう機会をいただいているんじゃないのかなというふうにメッセージをお伺いして思いました。

僕としてはある種のあるアクションを起こしたいなと思ったので、どこかでお話しさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

**【小池知事】** 何か思わせぶりな。

**【伊勢谷友介様】** いや、じゃないんですよ。何かちょっと、軽くだけになるんですけど、僕はこの懇談会に参加させていただく中で、小池都知事のこの分厚い、何ならすごく

具体性のある、このビジョンですよね。これをご存じない方があまりにも多くないですか。小池都知事のビジョンというのが違うところにいらっしゃっているというふうな感じがするので、僕、これって都が抱える社会課題じゃないですか。それをちゃんと明言化していて、こういうふうにしたいというふうなことがあるので、これでどこかのテーマをピックアップして、ビジコン（ビジネスコンテスト）した方がいいんじゃないかと思って。つまり、民間が自分でこの課題に対して解決できるビジネスをちょっとつくって提案する。だから、そのLGBTのこの辺の話とか、ビジネスではかなり解決が難しいとは思いますが、でも、こういうことをそういうふうな、民間が関わって、社会を変えられるきっかけみたいなものをつくっていくのって、まあ、キャンペーンとしてアピールにもなるし、民間がちゃんと関わって、思いのある民間が集まってくれるきっかけ。誰が思いがあるかというのも、都も理解できると思うので、そんなことをやってみたら面白いんじゃないのかなとちょっと思った次第です。すみません。

**【小池知事】** ありがとうございます。

さあ、リアクション等。みなみちゃん、ありますか。

**【高橋みなみ様】** そうですね。本当にお三方のお話聞いて、何だかいつできたか分からない常識に我々が捕らわれているということをもっと改めて痛感させられました。やはり、亜希さんのお話にもありましたけど、障害者の方を身近に見ても、何か助けなきゃという気持ちが出てくるんです。それはきっと我々が対面したときにどういうふうに接したらいいのかの接し方を知らなかったりもしますし、アブディンさんのお話にもありましたけど、若者の底力というのがちょっとうれしかったんですよ。

私は26歳なので若者かなと思ったんですけども、生きた経験を積むために海外に行くべきなんじゃないかということだったり、私も中学生の時に職場体験みたいな形で老人ホームに行かせていただいたんですけど、そのときに得た刺激はずっと残っているんです。もっと小さい時から海外経験というものを積んだ方が何か生きていくんじゃないかなというふうに思いましたし、パッケンさんの2050年そんな先もちゃんともっと明確に自分で考えたことがあるかなと思ったときに難しいなと思ったんです。

どうしても目の前のことをすごく見てしまうので、もちろん今も見なきゃいけないし、先も見なきゃいけないしと思うんですけども、もっと若者だったり大人たちのこの微妙な隙間というものを詰めていきたいなというふうに思いました。大人にとっての子供の意見は刺激だし、子供にとっては大人の意見はすごく刺激だと思うんです。ただ、やっぱり

そこに若干の溝があったりとかもするのかなと思うので、今後もっと柔軟性のある未来をつくっていくためには、何か議論していきたいなというのをすごく感じました。ありがとうございました。

【小池知事】      ありがとうございます。いかがでしょうか。はい。松澤さん。

【松澤香様】      プレゼンありがとうございました。お話を聞いていて、キリンとゾウの例もそうですし、亜希さんのお話もそうだったんですけども、今、みなみさんの方からもご指摘があったように、やはり我々、何らかのサイレントな前提を頭の中に置いて考えたり、コミュニケーションしたりしているように思うんですよね。それはある意味、日本の美德だと、アメリカとか留学すると、やっぱりすごく言われるところでもあって、比較的同質的な人たちが、比較的同じようなサイレントな前提を共通することによって、思いやりができたとか、ケアしたりとか、まあ、付度（そんたく）されたりとかいうことがあり得るという話なわけですけども、今後たくさんの方々が個性を持って活躍していくということを考えたときに、よりそういう前提が共有されていないということを改めて明確に認識した上で、丁寧な眼差しを持って、丁寧な対話を積み重ねていくということがすごく求められていくんじゃないかなというのを思いました。

私の周りには車椅子の飲み友達っていなかったんですけど、亜希さんとご一緒するようになって、非常に車椅子ということ、正直考えないで一緒できるというのが私にとってはすごくやっぱりうれしいし、楽しいし、正直、目からうろこなところもあったりしまして、なので、今回のテーマは大変面白く拝聴しましたし、私自身もできることがあればやっていきたいなというふうに改めて思いました。

以上です。

【小池知事】      はい。宿輪さん。

【宿輪理紗様】      お三方、プレゼンありがとうございました。田口さんのお話にあったんですけども、会社で障害者になられた際に、初めての障害者だったから、ちょっと周りの方が対応が難しかったというお話があったと思うんですが、私は、それは小学校の頃から身近に障害者の方がいらっしゃれば、自然と対応が身についていくものだと思うんです。今は特別支援学級だったりとか、普通の学校には入らないような障害者の方もたくさんいらっしゃると思うんですけども、小学校の頃から当たり前のように佐藤さんとか高橋さんがいらっしゃるように、障害者の方が身の回りにいるという状況を子供の頃から積み上げていけば、会社に入ったときにそんなに対応が難しいということもないと思いま

す。

また、パッケンさんのお話にあったんですけども、指向性とか議論のダイバーシティが必要だ、2050年とか100年後のことを考えたときに、きちんと頭の柔らかさが必要だということもあったと思うんですけども、それはやはりアブディンさんのお話ともつながりますが、都の若者を発展途上国に行かせるという体験が、発展途上国じゃなくてもいいんですけども、ほかの経験をさせるということが非常に重要だと思います。

私は小中高と女子校だったんですけども、大学に入った際に、まず男性がいるだけで少しびっくりしたんですね。もちろん理系ということもあって、男性の方が多い環境ということで、自分が今まで普通だと思っていた環境が普通じゃなかったときというのはかなりびっくりもしますし、それから得られる経験がすごくあると思います。それを強制的に都から中学生とか高校生からそういう教育をさせていくのが一番いいのではないかなというふうに感じました。

ありがとうございました。

**【小池知事】** ありがとうございます。皆さん、ご意見いかがでしょうか。はい。青木さん。

**【青木亮輔様】** どうもプレゼンありがとうございました。すごい色々な気づきをいただいて、本当に、先ほどワクワクしたという話もあったと思うんですけど、僕も本当にワクワクしました。本当に僕なんか不器用な人間で、今出てきたような色々な課題があって、それをあと33年で本当に解決できるのかなと、ちょっと自分が解決するとイメージしたときに、何かすごく33年か、あつと言う間だなというふうに思っちゃったんですけど。

ただ、先ほどの経験、多様性を認めるということはやっぱり経験の多様性というのがすごい必要で、色々な経験を僕からもしていかなきゃいけないんだなというふうに思って、それが直近で言うと、やっぱりオリンピック・パラリンピック、そういったところで、この間、上野のイベントも参加させていただいて、ああ、今こうなっているんだ、すごい格好いいなとか、この間、アブディンさんと一緒にトイレ行ったりとかして、ああ、目が見えないとそういったところが大変なんだとかですね。そういう一つ一つの経験が僕にとってすごく新鮮で、そういう経験をできる環境を整えていくことがその期間を短縮することにはすごい必要なんだろうなというふうに思いました。

ただ、ワクワクするというのが、今、生まれた子供たちが亡くなる頃というのは、もう22世紀になっていて、その頃って本当にどんな東京で、どんな日本になっているのかなと

というのが何となくすごい、ちょっと見えないんですけど、すごく楽しみだなとワクワクしました。ありがとうございました。

【小池知事】 ありがとうございます。あと、パックスンが指摘したAIの危機というので、これからAI、ロボットが人間に替わるというので、ここに職業が一杯書いてあるけど、これは残る方？ 残らない方？

【パックスン（パトリック・ハーラン）様】 これは消える方です。

【小池知事】 消える方。

【パックスン（パトリック・ハーラン）様】 はい。皆さん、自分のところをチェックしてください。

【小池知事】 皆さん、どうしますか。消える？ 今、AIはものすごいスピードで進化しているということから、これは冗談じゃなくて、年々加速して、そして、これまでの仕事が消えちゃうということなんだと。このことを心に刻んでおかないといけないと思うんですけど、何か加えることはありますか。

【パックスン（パトリック・ハーラン）様】 僕はこれに関しては、ベーシックインカムとちょうどその前のスライドにある案がありまして、このベーシックインカムというのは最低収入を保障する制度であって、小規模であちこちで実験されていますが、割とその実験の結果も良くて、最低収入を保障すると、みんなが自分のやりたいことに向けて、訓練を受けたり、教育を受けたり、結局、最終的に生活費をもらっているけど、それ以上の納税額が上がるわけ。それぞれの自治体も得するようになる。結構、意外とサステナブルな政策でもあって、このベーシックインカムとか導入されて、例えば再来年に導入されたら、30年後にどうなっているのかと言うと、働くというこの単語に対する考え方も、さっきのジェンダーの概念と同じぐらい変わっているかもしれません。

働き方改革と、僕らは言っているんですけど、それは生計を立てるためにどういう仕事、作業をすればいいかという前提で考えているんですけど、もしかしたら、このベーシックインカムでサステナブルなそういう経済環境ができれば、みんながやりたいことをやって、お互い喜ばせ合うような作業に専念する。生計を立てる心配から少し人間の1日の過程が離れていくかもしれないというふうに、AIの危機とベーシックインカムを少しくっつけて考えようかなと僕は思っています。これがさっきから言っている、そのとんでもない案。何言ってんだと多分、再来年の政策を考えなきゃいけない皆さんは思っているかもしれないんですけど。

【伊勢谷友介様】 いや、でも、僕も同じように、完全に同じように考えています。だから、それはそうっぽいけど。

【小池知事】 そうっぽいですか。

【パクン（パトリック・ハーラン）様】 そうっぽいですか。巻き込んでいいんですか。味方が欲しいです。

【長谷部健様】 もちろん。今ある仕事の半分以上がなくなると言う学者がいて、僕も今、娘が3人いるんだけど、彼女たちが大人になった時にどうなるんだろうということを一生懸命考える。それが2050年に近いんだけど、きっと本当になくなると思いますね。だって、僕が子供の頃に、まずインターネットは想像できてなくて、切符切りをやりたいと思っていた人たちが、今、大分それも減ってきたとか。携帯電話屋さんなんて、あんまり想像してなかった。だけど、やっぱりそこで大きなイノベーションが起きてきて、大きく変わってきている。だから、やっぱりこれは昔から起きていることで、今回のこのインターネットを通じたIoTの変革というのは、もう無血の革命が起きていると同じ。

今まで革命というのは、血を流すことが革命だったから分かりやすかったけど、一夜にして変わるということがあったけど、今はそれが目に見えていない革命が起きていて、それが見えている人はきつとこの先も商売がうまくいっているような。でも、それをどうやって見えるかということのをイメージしなきゃいけない。僕らが今、イメージシヨンできてないけど、次の世代がもう少しイメージシヨンできるようにするためには、やっぱり色々な教育をしていく必要があって、きつと詰め込み型の教育から発想力、応用力というのをどういうふうに鍛えていけばいいとか、あとはさっき言ったベーシックインカムが来れば、僕もそれはあるんじゃないかと思うんだけど、働かないことが普通になってきて、でも、違う何か価値を生み出すことが今の仕事に代わる何か。それはもしかしたらコミュニケーションをとって、みんなで仲良くして暮らしていくことが一番ピースだとしたら、もしかしたら宴会を仕切るやつとか、合コンを仕切るやつとか、そこで面白いことするやつが一番重要視されるような時代が来るんじゃないかとか、チャンスとかね。

【パクン（パトリック・ハーラン）様】 よっしゃ。革命だ。

【長谷部健様】 またさっきのあれで、発想を変えなきゃいけないことで、ちょっと話が飛びそうだけど、例えば今、渋谷区では、「子供たちにとって障害者が普通にいる」と、さっき宿輪さん話したけど、それを考えたときに、特別支援学級というのがあって、学校の中でやっぱりそこにどうしても障害を持っている人がたくさん行くわけですね。でも、

本当ならもっと交わって一緒にやりたいと思うけど、そうすると、補助をしなきゃいけない教員とかコストの話が出てきて、なかなか難しいということが言われるんだけど、でも、よく考えて、発想変えたら、社会に出たらみんなが助けていくというのが普通なんだから、助ける訓練をすればいいじゃんと思えば、それも外れる。まあ、どうしようもない人もいるよ。もう本当にずっと騒いじゃうとか、それは特別支援学級に行けばいいかもしれないけど、今、ボーダーにいる人たちとかは、もしかしたらそれで学級崩壊が起きないようにする教育をすればいいんだし、それを起きないようにみんなでする大人にならなきゃいけないとか、やっぱりそうやって発想を変えて、教育の分野で今日のお話を聞いていたら、もっともっと布石を打っていかなきゃいけないのかなというのをちょっと感じました。

【小池知事】 田根さん、パリから参加。はい。

【田根剛様】 多様性について伺っていたときに、特に自分も、それこそベーシックインカムの話とかというのはすごく、ここでかなり積極的に社会実験として取り組まれているとか、多様性という表現も、やっぱりフランスがすごく政治的に、色々な移民がいる中で、多様性というキーワードが社会をまとめ上げる一つのマニフェストになっているというのがある中で、今日の発表を伺っていても、「余裕」の問題なのかなと思ったんですよ。余裕があることによって、それが許せるとか、認められるとか、楽しめるとか、頑張れるという、そういうことができるのが多様性じゃないかと思うと、なぜ余裕が生まれないかと言うと、やっぱり今の現状の社会において、お金と時間というものは非常に管理するシステムになっている。そうすると、やっぱり働くイコール金銭につながらなきゃいけないとか、頑張るイコール時間が限られているとかそういうことが制約になっていると思うと、その概念が先ほどの発想を変えるという意味で、時間とお金と働くとか喜ぶとか生きるというのが切り離されたときに、初めて多様性が社会として実現できるのかなというイメージを思いました。

なので、経済と時間というのが20世紀の間にすごく強固な近代社会をつくったんですけど、そこが多様性が合わないのは、やっぱり余裕を持って生きて暮らしていく時間の概念が経済と非常に密接だというのが苦しいのかなという印象でした。

【小池知事】 はい。伊勢谷さん、どうぞ。

【伊勢谷友介様】 いいですか。いや、そのことが最近、僕の中でものすごく大事なトピックで、何を、余裕って何だということを考えると、人間の余裕って、これ、自分の欲求のレベルが高くなっているということなんですね。人間としての。皆さん、多分うなず



いていると思うんですけど、おそらく僕らは生きるのが必死だった時代から、生きることを、ベーシックインカムも含めて、AIの導入によって当たり前になってくると、その次に僕らが本質的にちゃんと意識しなくちゃいけない部分というのは、実は地球の再生能力を超えない人間の社会の消費能力というのに、バランスをとり始める側になっていくということだと僕は思うんですよね。その過程の中に、僕らはある種、欲求というのが高次元の所に向けて、つまり、人間というのは社会性が必要な動物ですから、その社会性、社会がないと個人が生きられない。つまり、種の存続ということが実は個人の命の意味であることをもう一回改めてはっきりさせることがあると思うんですよね。

つまり、何を言いたいかと言うと、働くということが自分の食いぶちを稼いで、誰かよりも裕福になるという次元から、働くということは未来をつくるために今、何をやっているか。現在の行動を自分で決定して、行動して決めて、実際に未来をつくっていくというのが実は働くの本当の意味に変わっていくような気がするんですよね。これが僕、パッケンさんのAIから来て、それで、何でしたっけ。お金。

【パッケン（パトリック・ハーラン）様】 ベーシックインカム？

【伊勢谷友介様】 ベーシックインカム。それから、今度、様々なものがどんどんこの進化の形で何を行っているかと言うと、集権から全て分権に行ってて、エネルギーから、政治から、お金の体系から全部、今まで集権的に国家がやり、例えばお金であれば、国家がやって、それから銀行がやり始めて、今度は今、公共貨幣とか、新しいビットコイン、ブロックチェーン、様々な。もう機関がつくるものではなくて、個人の自由と責任が最大化してくる。だから、僕らが未来をつくるし、僕らが未来のことを心配する。今はまだ政治家の方々だけと言う方が多いんですけど、そこをどんどん民間に落としていくという、そのきっかけが実は僕ら個人個人の余裕になっているし、それで、僕らだって、自分たちの未来のために集まっているのでも何でもなくて、未来のことを想像して集まれるというふうなのが今の現在の社会の新しいレベルになってきているんじゃないのかなど。だから、民間がここまで関わらせていただける機会をいただいて、発言させていただく機会もいただけるのも、何かその形の結論と言うか、今の状態なんだなと思って、ますます皆さんの意見を加速させたいなという、今日、意見をいただけた気がしております。

【小池知事】 はい。メイミさん。

【メイミ様】 メイミです。すみません。また話が変わるんですけども、お三方のプレゼン、すごく楽しく聞かせていただきました。ありがとうございました。

まず田口さんのお話を聞いていまして、自分の日頃の体験のことを色々と思い起こしている中で、色々な障害を持った障害者の方たちと交流をしたときに感じるのは、決して弱い存在というふうに思わないんですね。色々な障害がある中で、その人のすごく特性だったり、強みだったり、私にはない魅力であったりだとか、学ぶことがたくさんありまして、そうすると、私がサポートする場面もあれば、その方から教えていただいたり、色々協力していただいたりというようなこともあります。

こういうことというのは日頃接していないとやっぱり分からないから、弱者であるだとか、助けなければいけない存在とどうしても思ってしまうと思うんですね。関わるイベントは色々あるんですけども、障害者の施設で催しがあったりだとか、あとは聴覚障害者の方とよく接していますので、「耳の日」というイベントがあったりだとか、色々なイベントがあるんですけど、そういう場所に足を運んだときに、一般の方も来ているんですけど、ほとんどがボランティアで関わっている人、日頃から何かしら関わっている人がほとんどで、本当はオープンなものなのに、関わっていない一般の人というのはわざわざ足を運んでこないですよ。

それと比較して、NO LIMITSのイベントに参加させていただきました。あと、先日、「サイレンス」と言っても、音のない世界を体験するというプログラムを体験してきたんですけども、そこに足を運んだときに、来ている方たちというのは日頃障害者の方たちと接していなかったりする方たちが、障害者と接しようとかそういうのではなく、単純にそこが面白そうだから足を運ぶと。そんな方たちがたくさんいらっちゃって、何か壁を取っ払えるような、参加しやすい場というのが色々増えるといいのかなということを感じています。

すみません。説明が下手だったんですけども、あと、AIの危機ということですけども、仕事がどんどんAIに代替可能になっていく中で、私たちは仕事がしなくてもいいような状況になってくるのかなと。そうすると、じゃ、逆に仕事が遊びみたいな感じになったら、それもそれで面白いかと。自分のやりたいこと、自分の能力を生かして、そして、そういうふうな世界になっていったら面白いかとということを想像しました。

以上です。

**【小池知事】** それだけにパラリンピックというのは本当にいい機会で、皆さんも、子供たちにもみんなパラリンピックを通じて、障害のある方々と一緒にスポーツを楽しむとか、色々工夫したいと思います。

では、お願いします。レディファースト、じゃ、りえさん。

【くわばたりえ様】　これからロボットが増えてきて、これだけの職業が減っていくというので、皆さん、これが未来だみたいな感じで語っているのが、私も納得できないというか、おばちゃんの頭なんでしょうか。そんなこと、まずあり得るのかということ、もしなって、いい日本になると全く私は思っていないというか。それがなぜかと言うと、例えば今、昔は洗濯を手で洗ってして、それが今、自動洗濯機が乾燥まで全部してくれる時代。ロボット掃除機がお部屋を掃除してくれる時代。すごい家事が楽になったというのもあるんですけど、それは助かっている理由としては、全部やってくれるじゃないですか。昔って、人と人が助け合ってくれたというか、洗濯とか何か手伝ってあげるみたいな近所付き合いがあったけど、今、それがなくなっている分、ロボットとかに頼っている、機械に頼っているという部分があるなと思って、昔は電話とかあったのが、今はもう携帯、人と会話するんじゃないかって、何でも言葉とかスタンプ一つとか、人間と人間がすごい少なくなっているなというのを感じていて、それで全部ロボットになってしまって、ほんまにええのかなというか。例えばこの中の中学校教員、これがもしロボットがやったときに、ロボットが子供に勉強を教えるだけが学校なのとちゃうやんかみたいなことも言いたいし、何かロボットになることって、人間よりもすばらしいことができたらいいけど、人間しかできないことは人間がせなあかんやん。この中に全部ロボットにさせることは私はいいことやとは思わないということと……。

【伊勢谷友介様】　根本的には人間がやることのサポートですよ。だから、とられるわけでも何でもありませんし、条件は多分本当に……。

【くわばたりえ様】　そうなの。私は全部。

【伊勢谷友介様】　でも、一人の家庭の人が増えているじゃないですか。核家族化が。そうすると家事が増えるじゃないですか。そうすると、誰かに頼むストレスよりコンピューターにしてもらってストレスのなさってやばくないですか。

【くわばたりえ様】　いや、それはすごいごもつともなんですけど、全部コンピューターとやって、誰かとの会話って大切なのと違うかなというか。

【伊勢谷友介様】　家事の会話はむしろしないぐらいの方が、僕はひとり暮らしなので、すごい助かります。俺、掃除機に色々お願いするのは嫌ですもん。

【くわばたりえ様】　掃除機ね。だから、確かにそうやと思うんですけど、じゃ、例えば、私の住んでいる所で、子供たちがお正月、おじいちゃん、おばあちゃんに無記名で年

賀状を書くというのがあるんですよ。だから、正月にそういう誰かの字を書いたものが届くとかそういうことも大切というか、私も人間のつながりというの、確かに色々なひとり暮らしの人とかのサポートはすごい大切だと。誰かに気兼ねなく。例えば、私、分からないですけど、これから老後、排泄物なんか誰かにやってもらうの、確かに嫌ですよ。それを誰か、ほかのロボットみたいなのがやってくれたら恥ずかしくもないし、そういうところ、いいかなと思うけど、今日あったこと、誰かにしゃべりたいときに、ロボットがベラベラ、ベラベラしゃべってくれたらいいけど、何かもっとゲラゲラ笑ってくれたり、全然、面白いこと言ってもシーンとなったら、「何でやねん」みたいな、こっちも言えたりみたいな、何か会話というのが大切だなというのを思うのと、あと、障害の話で、目に見える障害というか、車椅子、足が不自由です。白いつえをついていたら目が不自由なんだなと分かるじゃないですか。

今、発達障害というのが色々、私も子供がいて小学校に上がったり、あと、小さい子だと色々あるんですけど、色々な目に見える障害、目に見えない障害、たくさんあると思うんですけど、先ほど言われた、学校の中でたくさん障害のある子と一緒に接することで大分変わってくる。私も子供が保育園の時に、そういうので、ああ、そういう子、何かそれが当たり前みたいな教室を見て、ああ、いいなというふうに思っていたんですけど、小学校に入って、1個思ったのが、学校の先生の知識が少な過ぎると言うか、こういう障害がある子が、こういう行動をとったときに先生がどうしていいか分かっていないというのが多いのと、あと、保護者。急に「キーン」となったときに、「何、あの子、もうあの子と友達になったらあかん」みたいな、何かそういうふうになったりするから、だから、もっと知ると言うことが、何も知らないというのが多過ぎるから、何かこっちも知らないけない。でも、その知ることは、学校の先生がまず、学校の先生に何でも言います。先生も大変ですからあれなんですけど、先生も、今すごく発達障害の子供って増えているので、そういう先生の知識も増やしていかなくてはいけないんじゃないかなと思いました。

【伊勢谷友介様】      それがAIだったら、もう一人ずつ見ていく。大丈夫と。

【くわばたりえ様】      それ、本気で言うてるんですかと私、もう何でもAIなの？

【伊勢谷友介様】      いやいや、本気で言っている。データですよ。ナレッジ、ナレッジ。

【くわばたりえ様】      データ？ 私、もう全然分からへん。じゃ、もう2050年、私、楽しみにします。

【伊勢谷友介様】      辞書が頭に入っている人がいると思えば最高じゃないですか。

【くわばたりえ様】 いいの？

【伊勢谷友介様】 うん。

【くわばたりえ様】 全然分からへん。

【メイミ様】 すみません。

【小池知事】 どうぞ。

【メイミ様】 その意見に対しての案ですけれども、今、ほら、スマホが普及しても、ガラケーがいいと言う人がいたりだとかあると思うんですけれども、それと同じように、ロボットか、人間か、選択肢が色々あるような。

【伊勢谷友介様】 選択肢が増えたと。

【メイミ様】 増えたという考え方にちょっと変えてみると。

【伊勢谷友介様】 ああ、そうですね。

【メイミ様】 多分ロボットの進化はもう防げないと思うので。

【伊勢谷友介様】 あとおひとり様も増えるのはどうしようもなく。おそらく僕思うんですけど、環境が変わると同時に、今度おひとり様たちが一緒に住むようになりますから、そうすると、AIじゃなくて、そのおひとり様同士でコミュニケーションして、AIにはちょうどみんなが面倒くさいところを考えてもらったり、エネルギーのバランスをとってもらったりとか、集団で生活するときに。そうやってうまく使いますよ。

【パッケン（パトリック・ハーラン）様】 1つだけこの資料を補足させてください。オンラインで色々な消える職業ランキングとか出まして、これは意外と面白いというか、こういうところまでもという、まあ、危機感をあおるような資料をわざわざピックアップして紹介しています。僕はこれが全部消えるとは思っていないし、減るかもしれないですけど、教員は世界中の中から一番いい情報を持ったAIの教員と直接接触する。子供とのケアを担当する人間の教員のコラボレーションになるんじゃないかなという意味で、こういう絵にしたんですよ。

全部悪い方向ではないと思うんですけど、それが補足の一つで、もう一つ言わせていただきますと……。

【伊勢谷友介様】 むしろAIを知ってほしい。

【くわばたりえ様】 私は知らないんですよ。ロボットなんか嫌やという人間だから。

【パッケン（パトリック・ハーラン）様】 分かる、分かる。例えば介護士の話。さっき介護士の話がちょっと出ましたけど、介護士が、例えばシーツを変えたり、洗濯したり、

資料をまとめたり、庶務がすごく多いわけですよ。だったら、その庶務を全部ロボットがやって、「今日どう？ 体調。元気？」と接するのは人間にして、その人間の時間が確保ができるのは、AI危機であって、AI革命のおかげでもあると思うんですね。そういうふうにちょっとプラスに、危険だけではなく、機会も考えていただきたいというメッセージだったんです。すみません。

【長谷部健様】 それをもうちょいシンプルに考えると、例えばドラえもんが横にずっといてくれたらどうかなと。

【くわばたりえ様】 もうむっちゃ。私、欲しいもん、一杯あります。

【伊勢谷友介様】 良かった。

【長谷部健様】 だから、そういう感じにちょっとイメージすれば良くて、ゼロか100かで考えないで、全部が血も涙もないロボットだけになっちゃうんじゃないけど。

【くわばたりえ様】 なるほどね。

【長谷部健様】 そういう機械があつたりとか。あとは、ここにある、今これが全部もちろんなくなるかどうか分からないけど、今、仕事ももちろん楽しいし、でも、大変な部分もあるじゃない？

【くわばたりえ様】 はい。

【長谷部健様】 もし僕だったら、俺も本当は仕事なんかしないで、毎日、体育だけして暮らしたいと思っている人間なんです。本当は色々なスポーツして。

【くわばたりえ様】 走りたいんですね。

【長谷部健様】 それを充実できる。でも、スポーツで人と対決するということはきっとなくなるし、もしかしたら、恋愛ばかりしてても楽しい人生が。いや、もしそういうことが好きであればとかね。ロボットじゃできないこと、自分が感じて楽しいことというのをもっと追求できるチャンスがあつたり。それが、ゼロ、100じゃなくて、ドラえもんが横にいてそういうこととか、そういうふうイメージしていくと、決してそんな危ない、つまらない世界ではないんじゃないかなという気はして。

【くわばたりえ様】 なるほど。困っていることだけはドラえもんによってもらって、自分のやりたいことは自分でやるという。

【長谷部健様】 そうそうそう。

【伊勢谷友介様】 とりあえずお掃除ロボット使ってみると、まじでありがたいですよ。お掃除ロボットやっている間に別のことを考えられますから。子供の進路の話とか。

【くわばたりえ様】　そうですね。なるほど。

【伊勢谷友介様】　はい。未来ビジョンの話とか。

【長谷部健様】　さっきのパックンの言う発想を変えるというのをちょっとしてみるといいかもしれない。

【くわばたりえ様】　すみません。おばちゃんに分かりやすく、皆さんありがとうございます。

【小池知事】　はい。菊地さん。ピアニストは消えるのかな。

【菊地裕介様】　いや、ちょっと話の流れ的に。今、ドラえもんのお話が出てきましたけれど、もしかしたら、それこそ共生という観点から行けば、ロボットか、人間かということをもっと区別することすらなくなる時代が来るかもしれないですよ。もっと先。今だって、まあ、今はまだAIにしても、ロボットにしても、まだちょっと未完成なので、ああ、これはロボットだって分かっちゃうかもしれないけど、自動応答音声だってありますよね。あれだって、相手が人間なのか、ロボットなのかと。ロボットと言うか、コンピューターなのか。それを認識しなくなる時というのがあるかもしれないですよ。相手がロボットなのか、人間なのかということは、男なのか、女なのかというのと同じぐらい、区別の必要がないということが、それも全部社会の一員というふうになるかもしれないと。今のお話の流れは、僕、そんなことを考えながら聞いていたんですけども、ちょっとお話を戻しますけれども、僕も大学の現場で働いているので、色々な障害を持つ人と交流するという、発想を変えるということ。それっていきなりはやっぱり無理だと思うんですよ。

今年度、やっとなんというか、何とというか、うちの大学にも全盲の学生が入学してくるようになります。そのときにももちろん楽譜を見て、それを歌うという課題があるんですね。それはそのままでは彼にはできないから、そのために点字の楽譜をつくってあげるとか、色々手間と言っていいのかわからないですけど、そういうことをしなければいけない状況にはなったんですけども、でも、みんな大歓迎ですね。もちろんその学生がすごく感性が素晴らしいということもあるんですけども、ほかの学生たちにとって、これは素晴らしいチャンスだというふうにも我々はみんな認識していて、だって、確かに触れたことはないんですよ。想像もつかないし、何をしてあげるといってもおこがましいですけど、したらいいのかということもわからないし、どういうふうに見えるというか、聞こえているのかということも今まで触れてないから知らなかったんですけども、そうやって

来てくれることによって、すごくそういう発想が広がるチャンスだと思うんです。やっぱり発想を広げる、発想を広げる、新しいこと、突拍子もないことを考えろと言われてたって、何もきっかけがなければ、生み出せと言われても生まれないわけで、だから、少しでもいいからそういう新しい出会いがあれば、僕はいいと思うんですね。

本当にちょっとしたことだけど、通路に点字ブロックが付くとかそういうちょっとした変化、これを一個ずつやっていくことが、結局2050年に向かって大きな変化というのは急に起きるわけじゃない。その変化の過程を見るということは、すごく僕、大事だと思うんですよ。若者のうちというのは、やっぱり世の中が変わっていくということがそもそも想像できないんですね。でも、僕なんかももう40歳ですけども、そうすると、子供の頃と今と、どれぐらい世の中が変わっているかということは少し認識している。でもって、今、2050年のことを考えるから、30年後、33年後どうなるかということも想像するじゃないですか。

僕がやっているクラシック音楽というのはもっと、100年も200年も昔の人々のことを考えるということなんですけど、それと未来のことを考えることというのは、これはどっちも等しくリンクし得ることだと僕は思うんです。だから、時代が変化していくことというのは本当に大歓迎だし、変化していくのをみんなで味わっていけばね。そうしたら昔の人のすばらしい発想というの、未来につなげていけるんじゃないかと僕はそんなふうに信じています。

ありがとうございます。

**【小池知事】** はい。時間がもうわずかなんですが、くわばたりえさん、すごくいい意見を出してもらって、これから次回はアンドロイドのくわばたりえを置いておくと活発化するんじゃないかなと思いますけど。

**【くわばたりえ様】** ちょっとやめてくださいよ。

**【小池知事】** じゃ、愛音さん。短めにお願いします。

**【浜田愛音様】** 私が思ったのは、やっぱり皆さんの意見を聞いてて、時代の流れに沿って物事を考えていく必要があるんだなと思っていて、私自身もAIのこと、全然分からないし、どっちかと言うと、くわばたさん派なんですね。

**【くわばたりえ様】** ありがとう。

**【浜田愛音様】** 自分も全然分からないし、AIについていくのはすごく大変なんですけど、やっぱりこの、今、パッケンのところの、大学受験にスマホの持ち込み許可をと



いうのがあるんですけど、私、これ、今、自分で思ってて、大賛成なんです。何でかと言うと、スマホというか、もうインターネットで流れている情報を全て理解することというのは不可能なんですけど、せっかくある情報を使えば、もっと自分の発想力だったりとか、自分の新しい視野というのは広がっていくんじゃないかなと思っていて、実際に今の入試というのは、インターネットで検索すればすぐに出てくるような入試なんです。私も過去問を解いてて、すごい思うんですよ。

【伊勢谷友介様】 普通の入試じゃなくて答えを求めるものじゃないということだ。

【浜田愛音様】 過去問を解いてて、インターネットで検索すれば、それがポッと出てくるんですよ。それって自分でやっても面白くないんですね。自分の頭を使わないで手を動かしていれば見つかるような問題というのは、私は面白くないと思っているし、全然つまらないんですね。そんな。

【伊勢谷友介様】 高校生に大学受験の問題、つまんないと言われたらもうね。管理社会、もう最高、最高。もっとつくってみたいな感じで。

【パッケン（パトリック・ハーラン）様】 ねえ。社会人になってからも要らないスキルだよ。

【浜田愛音様】 もっと入試改革というのも進んでいるしという部分で、やっぱりAIの活躍だったりとか、AIの活用というのはすごい大切になってきているので、やっぱり娘さんだったりとかいらっしゃると思うんですけど、そういう、今後変わっていくので、その理解はみんなですていかなきゃいけないなと思っています。

【小池知事】 ありがとうございます。パッケンの資料の中に、騎士と書いてあったけど。騎士？

【伊勢谷友介様】 騎士？

【パッケン（パトリック・ハーラン）様】 ナイト。うん。

【太田雄貴様】 皆さん熱いですね。いいですね。本当に。お三方もありがとうございました。プレゼンの練習をしている田口さんを見て、東京オリンピックの招致の直前の自分を思い出したので。よく泣いたなと思いながら、お三方のお話を伺いました。

本当に皆さんが言っていることは全て正しいなと思っていて、どっちが正しいとかというのはない中で、皆さんの意見をお互いに尊重し得ることが大切なのかなと思って、僕もどっちかと言うと、くわばたさん派なんです。けども、その流れが変わらないのは間違いないと言えることで、そうなったときに自分がどういうときに喜びを感じるんだろうと

か、自分がどういうときに幸せになるんだろうという、自分のことを本当に知るとということが僕は人間に与えられたチャンスだと思うんですよね。けども、今はどっちかという、どっちが稼いだとか、どっちがモテるとか、人と比べることばかりにやっぱりどうしても目が行ってしまうので、そこでどうしても自分の幸せを見失いがちだと思うんですね。

じゃ、これを全部本質的なことを言うと、僕はやっぱり教育だと思うんですね。親に褒められたとかそういう成功体験。社会が自分を認知してくれたときの成功の体験を経験できる。こういう人たちがここにいるんだと思うんですね。けども、幼少期に成功体験を踏めなかった子たちというのは、なかなか大人になっても自信を持って一步を踏み出せなかったりするんで、本当に教育というのが僕は日本にとって一番大切なことなんじゃないかなと思うので、是非渋谷区も含め、先ほどの流れで、長谷部さん、頑張っしてほしいなと思うんですけど。頑張っほしいですね。

【小池知事】 ありがとうございます。漁師はこの中に書いてないから生き残るかもしれないですね。西田さん。

【西田圭志様】 そうですね。漁師はこの中に入っていないんですけど、漁師は経験と勘の世界でそういうAIとかじゃ代替できないと思われるかもしれないんですけど、今、北海道のスルメイカ漁が今年すごい不漁で、その漁場を判定するのにAIを使おうというのを新聞で見たんですけど、僕は経験と勘だとベテランの漁師たちに絶対かなわないけど、AIを使うと、そういう人たちとも勝負できるだろうから、早くAIが漁場を教えてくれる世界が来てくれるとうれしいなと思いますね。

【小池知事】 ありがとうございます。時間がもう過ぎてしまいました。今日は3人のプレゼンターの皆さん、ありがとうございます。皆さんの頭の中、柔らかくなったかと思います。

それから、アブディンさんが重要なことを書いて、提案してくれましたね。「攻めの姿勢でもっと外へ」ということをおっしゃっています。「アジアの国々はもっとアグレッシブ」ですよ。私はそのとおりだと思うし、何かこう、日本人はどうも内側にこもって、煮詰まってきたなという感じがします。やっぱり頭を柔らかくするためにも違う文化に触れてみるとかそういったことがとても重要だと、このことをアブディンさんは強調してくれているかと思います。

さて、時間が来ました。また次の機会でそれぞれプレゼンターの方にお問い合わせをしますけれども、これから、大分頭が。最初はもう、皆さん若いのに随分保守的な意見だな

とっていて、私の方がぶっ飛んでいる意見を出すんですよね。というか、考えを持っていたりするんだけど、でも、大分皆さん、2050年ということを想定し出して、いい流れになってきたかと思います。今日は落合さんがいないけれども、ご欠席ですけれども、落合さんあたりはかなりぶっ飛んでいると思いますから、また次回も色々な皆さんの希望、夢、これを存分に語って。今日はAIの不安を抱いた人と、いいぞという人とちょっと分かれましたがけれども、それも時代の流れの中で出てくるのだと思います。

時代の流れに沿うというより、私は是非東京で時代をつくりたいと、そのリード役に皆さんの柔らか頭で対応していただきたいなと思っていますので、また次回を楽しみにいたしております。今日は本当に、プレゼンテーションも含めてありがとうございました。

**【岩瀬次長】**　ありがとうございました。以上をもちまして、第4回東京未来ビジョン懇談会を終了いたします。

次回は9月上旬に開催いたします。本日は誠にありがとうございました。

※ 資料の訂正について

パトリック・ハーラン氏のプレゼンテーションにおいて、「AI・ロボットで代替可能性の高い職業」として提示されたものは、「代替可能性が低い職業」の誤りでした。当日の議論においては、上記のとおり誤った内容で議論されております。

なお、HP掲載資料については、正しい資料に差し替えております。

— 了 —